

20年前のひとりごと

放計協 西村和明

JNDC ニュースの創刊20周年記念にあたる核データニュースNo.26号を興味深く読み終った昨年の暮に、浅見(愷)さんから「記念号」に関連して何か面白いことを書いて欲しいという依頼があった。正月の休みに当時の手紙や議事録等のファイルを取り出して眺めているうち、文章の行間にある書かれていない部分がいっぱいと思い出されてきた。これらの思い出——出会い、別れ、喜び、悲しみ、驚き、感激——は、様々な場所と一瞬・一瞬間とにからみ合って、今も私の中に生きつづけている。個人的な主観に占められた他人の思い出など面白くもないと思うが、20年前のひとりごととして聞き流がして頂ければ幸いである。

JNDC ニュースが創刊された1966年3月といえば、当時私は2度目のアメリカ留学中であった。滞在を少し延長してワシントンで開かれる第1回の「中性子断面積テクノロジー」国際会議に出席し、情報を入手するようにとの指示が百田さんからあった。コロンビア大学のHavensやBNLに留学中の松延さんに始めて出会ったのもこの国際会議であった。この会議では、Critique とか Evaluation というタイトルがついた2つのセッションが主体であった。このようなタイトルは当時あまり見かけたことがなく、妙な言葉だなと思いつつも別に深く気にもとめなかった。帰国後シグマ委員会の仕事として評価作業に深く関係するようになるとは、当時全く予想もしていなかった。

Carbonの評価の仕事が何時頃始まったのかははっきりしないが、文献調査の内容をデータシートに記入する作業は1966年の暮には始まっていた。20年前の2月にはANLのWhalenにTOFの測定条件を問合わせる手紙を出している。同じ年の7月にはHarwellのUttleyにも彼のCarbonの σ_T の測定値について質問の手状を出したが、なかなか返事がなかった。仕方がないので、当時Harwellに留学中の浅見(明)さんに「それとなく聞いてくれ」という別便まで書いたことが記録に残っている。また1967年の11月13日付の、CCDNのSchwarzから百田さん宛の手紙のコピーによれば、

" Thank you for your letter dated 27th October. Your Carbon request has been answered, i.e. a tape with all present SCISRS data has been sent off."

とある。ともかくそれからJAERI 1218(1971年10月)として研究成果がまとまるまで、4年間にわたり連綿不断の戦いが続くことになった。

" Cの全断面積の評価で船を山上に運び上げたのは、当時あまり振わなかった実験屋の意気を奮い立たせよう" という百田さんの悲願は、少くとも私には全く通じなかった。担当メンバーは五十

嵐, 更田, 田中の皆さんと私の4人組であったが, 会合の度にそれまでに準備したデータや計算結果をもとに百田さん, 塚田さん, 中嶋さんの前で御前講演や報告をするという感じで, 3人の先生方の了解と指示がなければ, 仕事は一步も進まなかったように思われる。

この仕事の後遺症のせいかどうか, いまだに「評価」とか「評価する」という言葉にすごく敏感である。ある物理量の測定値から数式を用いて単に計算して数値を求めたに過ぎないのに, 「計算した」とは書かず「評価した」と書いてある文章がよくあるが, 私には評価という言葉はこのように軽々しく使えない。また, いくら精度のいい実験データでも, たった1点では多勢に無勢で, 評価曲線に寄与する度合が少ない。いわゆる

「百発百中ノ砲一門ハ百発一中ノ砲百門ニ対抗シ得」という先人の教訓が, 統計学上から誤りであったことを学んだのもCarbonの評価からであった。大砲の数をNとするときの戦力算出方式は米海軍の N^2 法則が有名であるが, 我々はデータ点の数をNとした $N^{1/2}$ 法則で「数の暴力」をうすめる方式を採用した。

20年前の1967年といえば, 7月に核データセンター設立の要望書が原子力学会長から原子力局長あてに提出された年である。設立が認可されたのは1977年7月であったから, 要望から設立まで実に10年の歳月が必要だったわけである。この設立に向ってのシグマ委員会のメンバーの意欲, 努力, 執念, 忍耐は, 全く敬服に値するものであった。要望書の出た翌年, シグマ委員会が設立してから5年目に, 2人の専任者から成る核データ研究室が発足した。研究と業務のバランスを取りながら, センター設立に向って私も微力を注ぎ, いくたびとなく壁にぶつかり, その度にエネルギーを損失した。勇気を振り起こして再び挑戦するときは, いつでも終戦に際して与えられた次の訓辞をつぶやいていた:

“……^{オオヨソ}大凡物は成る時に成るに非ずして, その因たるや遠く且つ微なり。諸子の苦難に対する
敢斗はやがて帝国興隆の光明とならん。……”

物理屋の集団であるシグマ委員会のメンバーは, また実によく議論した。対象が物理の問題のとき議論するのは当然としても, 物理ではない委員会の運営, 方針, 体制, 仕事の進め方等を決める場合でも, 合理的に議論して決めようとする傾向が強く, 妥協点がなかなか見出せなくて閉口する場合が多かったように思われる。その当時のストレス解消法は, 何故かそれから25年も昔の少年時代に肝銘した処生訓を唱えることであった:

“天下は一大活物にして区々たる死学問, 小才子の能く辯ずる所にあらず。必ずや世間の惨風を凌ぎ, 人生の酸味に飽き, 世態を知り, 人情を盡して, …… (勝 海舟)”

年頭を意識して、いささか堅苦しい文章になってしまいましたが、核データニュース20周年をお祝いすると共に、シグマ委員会諸兄の今後の健康と奮斗を唯々祈っております。

(1987年1月20日)